

これからの林業統計

統計数理研究所 林 知己夫

林業の分野に統計的方法が導入され、めざましい成果をあげてきた。これは、データを科学的に獲得しようとする *design of data* と言われる分野、データを解析し妥当な情報を得ようとする *analysis of data* と言われる分野においてともに活用されてきた。そのめざましさは、朝に一城を抜き、夕に一城をおとすと表現できる有様であった。しかし、ある所まで片付いてくると燃えつきてしまった感が出てきた。何となく惰性で流れるようになってきた。新しい問題も出てきたが、すべての人が一丸となって取組むほどにまだ熟していない。

世の中も変わった。生産、効率の指導原理から多目的機能評価、調和バランスのそれに転回してきた。ここに林業統計は如何に行くべきかの模索が始まったわけである。林業統計を含めた森林統計への道を求むべきとの声も高くなってきた。

この時に当って燃えた灰の中から不死鳥は蘇らねばならない。林業統計の研究の中に培われたポテンシャルは、不死鳥の身体を持っている。新しい問題解決に向って活発な動きが示されねばならぬ。これは、新たな問題へ既存の方法を単に適用することではないし、コンピュータをただ単に使ってみせることでもない。林業の問題において、われわれ林業の立場から真に肝要である問題を取りあげ、これを解決すべく、林業統計の方法を活用しなければならない。活用とは、過去の方法のみに拘泥することではない。問題解決のために新しい方法や方法論を開発することをも意味するものである。

問題も多岐に亘ってきたし、統計的方法も発展してきているし、コンピュータも能力を高めてきた。これは、昔日の比ではない。憶却は最大の敵である。倦まずたゆまず、勇気と努力を以てアイデアを豊に、ことを運ばねばならない。解くべきことは難しくなっている。難しいことは直接法で処理できるものではない。フェルマの

問題はそれまでの既存の数学でより以上に取扱えるものではなく、さらに進むためには全く新しい概念を必要とする。宇宙船は空気力学の範囲内だけで飛ばせるものではなく、通信や量子物理学の進展がなければ不可能である。われわれは局面を転換する新しい見方に立ち、新しい概念を作りあげなければ難しい問題は取扱えない。

ライフサイエンス、ソフトサイエンス、情報科学の見方を借りることも、もとより結構なことであるが、借り者だけではすまされない。われわれ自身が新しい観点を打ち建てねばならない。これは抽象的に考えても出来上るものではない。実際の現象に立ち向い難しい問題を何としても解決しようとしてデータと共に苦しむところに見えてくるものである。

この観点の上に立つとき、新しい地平線が現れる。その地平線に到達するために、技術的方法が工夫されてくる。こうした観点と方法とが、これからの林業、森林統計の中核となることであろう。

10周年を迎え、会誌が創刊されるに当って、鮮烈な気持ちと気魄を以て、研究が押し進められることを切に望む次第である。これには現場側も研究側もあるはずはない。何が大事かが認識されねばならない。この胎動が会誌の中に聞えてこなければならぬ。そのために会誌は活用されねばならないと思う。